

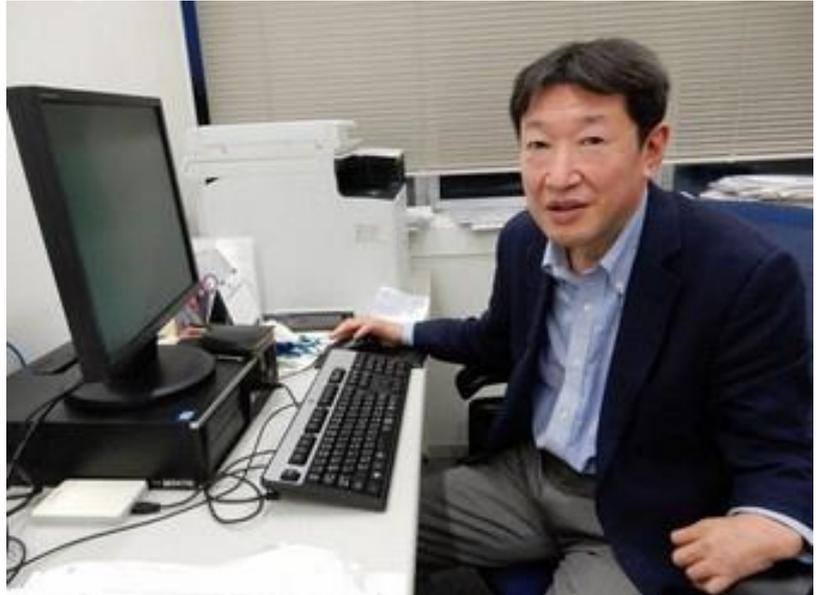
佐藤嗣道さん＝医療品行政を監視する薬害被害者

毎日新聞 2021年1月19日 東京朝刊

佐藤嗣道（さとう・つぐみち）さん（58）

「問題があれば、その兆候をできるだけ早くつかみ、警告や提言を迅速に出す。それが被害の拡大を防ぐうえで最も大切だ」

2020年9月、厚生労働省に設置された「医薬品等行政評価・監視委員会」。その委員としての思いをこう語った。有識者らで構成する第三者組織で、医薬品の安全管理や薬事制度に目を光らせ、薬害防止を目指す。



薬の効果や影響を大学で研究する、薬剤疫学の専門家だ。その一方で薬害被害の当事者という顔も持つ。

母親がサリドマイドが配合された胃腸薬を飲み、その影響で手に障害を持って1962年に生まれた。西ドイツ（当時）ではその前年に薬害の警告が出され、販売停止になっていた。日本の対応は遅く、被害を未然に防ぐことができなかった。行政の措置が後手に回り被害を拡大させる構図は、スモンやエイズ、C型肝炎などでも繰り返され、厳しく批判された。

その教訓から監視委は「機動的に動ける組織であることが必要」と強調する。医薬品は効果と副作用を冷静に分析することが重要で、新型コロナウイルスのワクチンについても検証を進めていく。

国と企業の責任が問われたサリドマイド訴訟の関係で、子どもの頃からマスコミの取材を受け被害を伝えてきた。今も医薬品の副作用に関する調査が研究テーマだ。

「薬害を起こさせないことが私の使命と思っている」。気負いなくさらりと口にした言葉が、背負うものの重さを感じさせた。〈文と写真・玉木達也〉

サリドマイドの被害者を支援する公益財団法人「いしすえ」理事長。
東京理科大講師。 北海道出身。